

氏名（本籍）	中間 眞司（鹿児島県）
学位の種類	博士（国際文化学）
学位記番号	甲 国第4号
学位授与年月日	平成27年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
論文題目	ルソーと音楽療法
論文審査委員	主査 外菌 幸一 教授 副査 森 孝晴 教授 副査 佐々木 亘 教授（鹿児島純心女子短期大学）

内容の要旨

中間眞司氏は論文6点を公表し、8回の学会報告を行っている。この博士学位論文は、これらの研究業績を踏まえて作成されている。本論文は基準字数（8万字）をはるかに上回る12万字以上の字数で書かれている。

本論文は以下に示す3部構成である。特に最終節において本論の帰結が述べられている。

§はじめに	p. 1～2
第一部 ジャン=ジャック・ルソー	p. 3～56
第二部 音楽と音楽療法	p. 57～73
第三部 音楽療法へアプローチ	p. 74～120
第五章 第二節 ルソー哲学による音楽療法の定義	p. 119～120
§文献	p. 121～130

§はじめに

1. 問題提起

人の心は視ることがかなわないものである。しかし或る程度、可視化が可能な心の表現である音楽を使って、例えば消極的な心の状態にある人に対して、音楽を意図的に提供し、自然な心の状態に移行させることを期待する営みが音楽療法である。

筆者は文筆家・音楽家であったルソー哲学から、音楽療法の理論的指針を提案することを目指している。

以下、各章節の概略を示す。

第一部 ジャン=ジャック・ルソー

第一章 経歴

第一節 先行研究

ルソーは、『ブリタニカ国際大百科事典』(1974)によると「フランスの文学者、思想家。」とある。英語版 *Britanica* (1987) には「French philosopher, writer,」とある。French は「フランスの～、国、人、語、風」などと訳され、あいまいな表現である。

第二節 スイス人

ルソーの第一論文『学問芸術論』の扉には「この地で私は、理解されないゆえに異邦人なのだ」と言う。『エミール』の扉では「ジュネーヴ市民ジャン=ジャック・ルソー」と掲げる。ここで French の解釈として、たしかに言えることは、ルソーは「フランス語で執筆した」ということである。そこで、以下のようなルソーのプロフィールを提案している。

ジャン=ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau

1712年6月28日ジュネーヴ共和国（現在；スイス連邦）に生まれ、1778年7月2日フランス王国（現在；フランス共和国）・パリ近郊エルムノンビルにて没した。フランス語で執筆した文学者、啓蒙思想家であり、当時の人工的、退廃的社会を鋭く批判し、感情の優位を強調した。フランス革命を思想的に準備したと評価されている。その基本理念は「自然主義」であり、「自然に帰れ」が格言として理解されている。政治的分野では「社会契約」「一般意思」の思想を展開した。また、教育思想家として「子どもの発見」「第二の誕生」「消極教育」を唱えた。文学・音楽における彼の思想・創作活動に対しては「ロマン主義の父」という呼称が与えられている。それまでの伝統から、根本的な価値転換作業を行い近代思想に大きな影響を与えた。音楽の業績ではオペラ《村の占師》の台本と作曲（1752）。主要図書に『人間不平等起原論』（1755）、『新エロイズ』（1756）、『社会契約論』（1762）、『エミール』（1762）、没後刊行の『告白』（1781、88）などがある。

第二章 ルソー島

第一節 島

1. はじめに

ルソーの生涯は「島嶼」また「陸の孤島」様の寒村に居住し島文化を享受していた。

2. 『ユートピア』

トマス・モア著『ユートピア』とは、ギリシア語の「どこにもない国」に由来する。モアは理想国家を島に提案した。モアの構想を展開したのが『社会契約論』とも捉えられる。

3. 島の定義

島とは「①周囲が水によって囲まれた小陸地。」である。しかし人は心理的な島として「②周囲からそこだけ孤立している地域。」も陸の孤島と言う。

4. 島に帰れ

「自然に帰れ」について、戸部松実は「自然」「帰る」という意味を、自分なりに「解釈」せよという。筆者は「島に帰れ」と考察した。桑原武夫は、ルソーの真実とは、文学的真実であると述べる。本論文では、ルソーの人生を、島と言うキーワードで検証する。

第二節 経験

1. ジュネーヴ共和国の地理／2. ルソー誕生の地／3. 父との読書

ルソーはジュネーヴ共和国で誕生した。その城郭都市はギリシアのポリスを彷彿とさせる。少年ルソーの家庭教育用図書にはニナの『歴史書』『ベネチアの歴史』などが含まれる。父との読書のなかに島学習があった。

4. 城郭の門限に遅れる／5. アヌシーの地理…ルソーは、城郭の閉門に遅れ出奔した。アヌシーの中州に住む、ヴァランス夫人に擁護を求めた。

6. ベネチア共和国の地理／7. ベネチアの取材レポート

ルソーは、ベネチア共和国の在フランス大使秘書に赴いた。ヴェネチアは多島国家である。ベネチア取材レポートが『音楽辞典』『社会契約論』『エミール』などに見られる。

8. レ・シャルメット／9. シュノンソー城／10. 陸の孤島；モチエ村／

11. サン=ピエール島／12. ブリテン島

13. ポプラの島：ルソー島

1778年ルソーを、ジラルダンにエルムノンビルの庭園に住ませた。庭園の小屋は、ロビンソン・クルーソー風であり、ルソーの思想を満足させる。此処でルソーは没する。ポプラの島に埋葬された。ポプラの島はルソー島と呼ばれようになった。

14. アイデアの島

ルソー島は、水面下の見えない基底なしでは地上部の島影は存在し得ない。基底は「見えない魂」にも似る。島に植わるポプラの樹木は、生命を象徴する「見える肉体」である。ポプラの島に描かれているアイデアは「人の目には見えない人間存在の真実」である。

第三節 著書解題

この節では、具体的にルソーの著書から、島に起因する叙述が列記される。

1. 『エミール』と『告白』に共通して「わたしが求めているもの、そう広くない一片の土地」との記述がある。シャルメットへの回想である。

2. 『音楽辞典』には「ナイルデルタに風にそよぐ葦から音楽が思いつかれた」とある。中州から音楽が発生したと言うのである。

3. オペラ《村の占い師》はフランスの里山が舞台である。ルソーが内心に描いていた環境を、モーツァルトが明確にコルシカ島を舞台として改作した。

4. 『社会契約論』でルソーは「ヨーロッパには、立法可能な国がまだ一つある。それは、コルシカ島である。」と言う。そこから 5. 『コルシカ憲法草案』が依頼された。

6. 『ロビンソン・クルーソー』は、『エミール』での自然の子を教育するためのルソーの

7. 推薦図書である。『エミール』は 8. 無人島教育論とも捉えられる。
9. 『新エロイズ』でスタロバンスキーはスイスに「ポリネシアの無人島がある」と言う。
10. エーゲ海文化から / 11. サン＝ピエール島

第三章 音楽での就職

ルソーは、修道士、音楽家、徒弟、小姓、浮浪児、寵児などの職業を転々とした。オペラに対する年金をも辞退した。そしてルソーは「簡単な生計の手段を考えだした。一ページいくらで楽譜を写すこと」—『告白』—と言う。そのような自活手段によって、貴族からの擁護を断ち切り、庶民の立場で社会を俯瞰することができた。

第四章 自然

第一節 自然主義の標語

1. 芸術での自然主義の発展の歴史を考察すると、風景画は、当初、宗教画や神話画の背景として二次的なテーマとしてしか扱われなかった。ルソーは自然主義で、ヴィヴァルディの《春》をフルートのために編曲することで、自己の内面に取り込んだ。
2. 音楽での自然主義…ルソーの「自然に帰れ」を、革命児モーツァルトが引き継ぐ。
3. 文学での描写…シェークスピアは死を恐れる自然と言う。『新エロイズ』はスイスの自然をロマンチックな癒しと価値転換をした。

第五章 深層心理

若かりしルソーは憧れをもって偽音楽教師を演じた。その企てとして、名前のアルファベットの綴りの順番を入れ替えて、偽名を発明した。このような言葉遊びは、字謎、交差対句法である。この「言葉を操作すること」は言語学的な関連性はないが、深層心理学的な意味を感じず。ルソーのテクニカルタームで言葉のゲームが試みられる。

第一節 言葉

1. 母語 ルソーは母語を「フランス語くらい、あらゆる意味で純粋に語ることのむづかしい言語はないのだ。」と言う。
2. 偽名 青年ルソーは放浪の途上「わたしはルソー **Rousseau** という名の綴り字をいれかえて、ヴォソール **Vaussore** と名をつた」。その偽名で偽音楽教師にありついた。

第二節 字謎

1. アナグラム「字謎」…例) live ⇔ evil
2. カイアズムス「交差対句法」…例) I dare not fight, flee I cannot. (戦う勇気はなし、逃げるわけにもいかぬ) アナグラムには、内包されている思想に共通性があり、相互に関連する意味合いをもつと解釈される。

第三節 深層心理の解明

1. キーワード

第四節 償い

1. 童話に描かれる子どもの境遇には史実がある。

『マッチ売りの少女』は作者の母がモデル。『ヘンゼルとグレーテル』は口減らし伝承。『フランダースの犬』には児童労働がある。

捨て子の系譜…『エミール』出版後も、上述の童話のように改善されない子どもの境遇が残された。

2. 子どもの発見…ルソーは「人は子ども時代とはどういうものであるかということを知りたくも知らない。」「おとなはおとなとして、子どもは子どもとして考慮しなければならない」——『エミール』——と言う。

3. 終わりに…ヒトの知的理解は「視→聴→覚」の順番を辿る。ルソーの精神である「自然に帰る」行為は一段ずつでない、破滅する危険性を秘めている。『エミール』で生徒への呼びかけ「わが子」はルソー自身のわが子への償いだったのではないかと推察される。

第六章 自然に帰れ

第一節 標語“自然に帰れ”

多くのルソー研究者が「自然に帰れ」とはルソーの言葉ではないと言う。しかし、多くの人物伝には、ルソーの言葉として流布している。では、そのような記述は、不正確な誤認なのであろうか。

第二節 目に訴える自然

3. 国土…『エミール』のドイツ語訳と英語訳をも参照した。ルソーが「空想の国」と言うとき、ドイツ語訳では *Utopienland* と訳されていて、ルソー島を暗示させる。

第三節 近似表現

「自然に帰れ」の近似表現が『エミール』から検索されている。

1. 原初に帰れ；吉澤昇らは『エミール』第一編冒頭の表現は「自然に帰れ」の裏返しの表現と指摘する。

「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる。」（今野一雄訳：これは文学的な訳調である）

「創造主の手から出る時には、すべてが善いものであるが、人間の手にかかるとそれらがみな例外なく悪いものになってゆく。」（長尾十三二ほか訳：これは教育学的な訳調である）

「万物の製作者の手をはなれるとき、すべては善いのに、人間の手にわたると、すべては悪くなる。」（樋口謹一訳：これは全集の編集委員会の総意的訳調である）

——『エミール』第一編冒頭——

2. 国に帰れと説く一文がある。ルソーが

「あなたの国 (*patrie*) へ帰るのだ。」（今野訳）

「あなたの祖国に帰りなさい。」（長尾ほか訳）

Return to your own country.（英訳）

と言うときの、英語訳された『エミール』では **country** の語が当られているが、それを **national** と読み替えることは容易い。**national** と **nature** はどちらも「生れる」を原義とする。ルソーが「国に帰れ」と言う場合、「自然に帰れ」という意味が含意されていると解釈できる。

3. 田舎に帰るという表現が「あたしたちの田舎の家に帰りましょう」とある。

4. 田園・里山・農村へ帰る；ルソーが「帰る」というところは田園、農村、里山である。原典は「田園へ行って」とある。

5. 木蔭を憧憬する態度「田園へ行って、木陰のある田舎風の家をもつ」と言うとき、“自然に帰れ”とは“木陰”への回帰とも受けとれる。

第四節 自然に帰れのルソー

「自然に帰れ」は、ルソーのプロフィールを要約する言葉としては認知されているが、ルソーを詳細に語るができる場合には、ルソー直筆の言葉を使用して正確に説明できるので、要約である「自然に帰れ」というスローガンは避けられる傾向にある。

ルソー哲学を「自然に帰れ」と集約することは、ルソー哲学をひも解くことが最終目標ではないということである。ルソー哲学の必要な部分だけを抽出して、「自然に帰れ」を大前提と総括することで、新たな課題に進めるのである。

この論文でも、「自然に帰れ」をルソー思想の大前提とすることで、その中に成立するひとつの小前提としての「音楽療法」をルソーの観点から捉えなおしている。そして、それを「自然としての音楽療法」という課題としてアプローチしている。

5. 農村へ帰れ

この論文では、ルソーの思想を、音楽療法へと結びつけようと試みる。宮沢賢治の思想を媒体とすることで、より容易にルソー哲学を音楽療法へと接合できるのではないか。いわばアマチュア音楽家から文筆家として自然を語ったルソーと、音楽をこよなく愛し農民とまじわった生活をした宮沢賢治の思想をつなぐ行為である。

第二部 音楽と音楽療法

第一章 音楽

ルソー著『音楽辞典』の解説によると、音楽の諸事項を以下のように説明している。

1. 音楽の発見は、ナイル河の氾濫後、砂州の葦に吹く風に由来する。
2. ルソーは旋律が「音楽の起源」であるとし、「言語抑揚説」の立場に立つ。
3. 『ギリシャ神話』のミューズ女神からミュージックの言葉が派生した。

第二節 音楽の構成

音楽の定義について、ルソーは「音楽とは～耳に快いように楽音を組み合わせる芸術」と述べている。

第二章 音楽療法の定義

第二節 音楽療法の変遷

日本へ音楽療法の理論がどのような立場、分野で導入されて来たかを、辞書の類で過去に発行された旧版から遡って検索している。

1960年代…『音楽辞典』（音楽之友社）に、心理療法として「音楽療法」が掲載されている。

1970年代…『ブリタニカ国際大百科事典』の日本語初版に「音楽療法」が掲載されている。

1980年代…『現代用語の基礎知識』に初めて「ミュージック・セラピー」の項目が「心理学」で登場し、『日本大百科全書』（小学館）に「音楽療法」の項目が掲載されている。

1990年版『現代用語の基礎知識』で「美容」として扱われ、同年「健康・医療」に心理学としても紹介されている。1991年版では「音楽」の扱いとなり、1999年版では「社会福祉」での掲載になる。

2000年代以降…『現代用語の基礎知識』は、「現代音楽」で紹介し、『日本国語大事典第二版』には「音楽療法」として掲載されている。『広辞苑第六版』には「音楽療法」の掲載がない。

第三部 音楽療法へのアプローチ

1. 先行研究

音楽学者の海老沢敏は、「プラトンの思想を、アリストテレスの思想を引証し、……ルソーのこうした捉え方を、〈音楽療法〉と結びつけ、そして〈音楽療法〉の淵源を〈アスクレーピエイオン〉の古代社会における活動と結びつけて、……」と述べている。

2. 教育論と療法

ケネス・E・ブルシアは「教育と療法は、そのどちらも人が知識やスキルを獲得するのを援助するという意味で似ている。……教育は知識やスキルを獲得することが第一の目標である、療法の目標の一つに「生活の質」の向上が掲げられる。

3. 音楽と音楽療法の関係性

音楽家が芸術性を追求し創造された作品が音楽である。音楽療法での空間は、聞き手である利用者がまず第一に主になる。

第二章 ルソー哲学からプレ音楽療法へ

第一節 社会福祉の萌芽

ルソーは彫金の丁稚時代、散歩の帰路、ジュネーヴの城壁の閉門に遅れて、そのまま出奔した。放浪の末、ヴァランス夫人の擁護をうける。ルソーの支払った代償は、夫人の寵児になることであった。そのような人間関係が『社会契約論』の基礎となった。

2. 社会福祉思想の準備

ルソー哲学の影響は、まずカントに対して甚大である。マルクス、レーニンらもそうであった。彼らの哲学理論は、社会福祉の萌芽と捉えられている。そのような系譜だけでとらえても、彼らに影響を与えたルソーは社会福祉の祖といえる。

3. 養護学校への準備

ルソー31歳のとき在ベネチア・フランス大使の秘書職に赴いた。余暇で、ヴィヴァルディが開設した音楽学校の演奏を聞いた。そのレポートが『告白』にある。「スクオーレというのは、貧しい少女たちを教育するために設けられた慈善院で、……」と記録されている。その先見の明は社会福祉を準備する思想の誕生と言えよう。

4. 伴侶テレーゼ

ルソーは、ベネチア大使の秘書職を辞したのちパリに戻る。パリの宿泊先に居た洗濯女テレーズとの内縁関係が始まる。テレーズは「時間の読み方を教え込むのに一ヶ月以上も努力した。……数字は一つもおぼえられない」というレベルの能力であった。ルソーは「彼女を教育しようと思った」が進展はなかった。しかし「こんなに無知な女も、……わたしが災難にみまわれたとき、……わたしを危険から救ってくれた」『告白』——と言う。ルソーが障害者をよく理解していた。

5. 弱者救済、博愛の精神

ルソーは『エミール』焚書によりスイスのサン=ピエール島に逃げた。ビエンヌ湖には大小の二つの島があった。小さい島は「大きいほうの島の風波による崩壊を修復するためにたえずそこから土を削ってもっていくので、やがては姿を消してしまう」と観察する。ルソーは逆説的に「弱者の身体はいつも強者の利益のために利用される」ことがあってはならないと言う。島の自然観察からは、博愛と社会福祉思想の根源的精神が誕生した。

第二節 先行研究より音楽療法へのアプローチ

スタロビンスキーは、ルソーの執筆態度にある矛盾が同毒療法である、と指摘している。音楽療法の同質の原理との符合性を認める。

サムエル・マシューの「同質の原理」とは、特に気分が落ちこんだ時には、暗い悲しい曲を選び、しばし悲哀を味わい、気持ちが上がってきたら徐々に明るい曲に変えていくのである。ルソーは音楽での体験ではないが、音楽療法の同質の原理との符合性がある。

音楽療法はクライアントの、懐かしい記憶を呼び起こす。自らの過去を懐かしく回想することが、新たな活動意欲を引き起こす。そのよう薬として音楽療法は機能する。

3. 同質の原理（その1；マゾヒスティック的な心理療法）

ルソーが里子に出されたボセイ村で受けた折檻の恐怖を「身の破滅となるべきものが、かえってわたしを安全にしてくれた。」と言葉にする行為が、自己カウンセリングである。

4. 同質の原理（その2；回想）

晩年に「ボセイ村での折檻」を回想した言葉である「病気そのものの中に療法をもとめるやり方」と言う行為が、ルソーの精神を安全にしてくれた。

5. 同質の原理（その3；同毒療法）

スタロバンスキーの理論は『エミール』と『社会契約論』は「病自身を病に対抗させるという原理」にもとづく壮大な計画を理論として展開したもの。「ルソーは執筆活動自体が病であり、書くことが治療であった」と述べる。

第三章 ルソーからモーツァルトへ

第一節 モーツァルト

音楽評論家パウル・ベッカー（1882～1937）は「モーツァルトを革命児といったとしても、政治的な革命の意味ではない。これルソーが叫んだ自然に還れというスローガンが目指す、精神と世界観との上の革命を意味しているのである」と述べている。

モーツァルト 22 歳の 1778 年に、ルソーは没した。生存年代が重なる二人が会うことは可能であったろうに、共通の価値観をもちながら、ついに会うことはなかった。

第二節 ルソー

1. オペラ《村の占い師》作曲の経緯

ルソー 40 歳のときオペラ《村の占い師》を作曲した。神童モーツァルトはわずか 12 歳でこのルソーのオペラを《バスティアンとバスティエヌ》へと改作した。モーツァルトは、ルソーが設定したフランスの田園風景の舞台を、コルシカ島のバスティアン村に書割を塗り替えた。その変更の趣旨は、アマチュア音楽家ルソーが不明瞭な主題の表現に留まっていた村社会でのエピソードを、プロの音楽家モーツァルトの手腕で、より主題を際立たせるために明確に島と設定したのである。

4. 最上の価値観の音楽

ルソーは『音楽辞典』で一般的な天才音楽家のことを述べている。それはモーツァルトに符合している。ルソーが言う天才音楽家とは「もの言わぬ宇宙」を楽音によって、人々の奥底にある感情を揺さぶるのであるが、モーツァルトの音楽は、そのような人間の自然性を最も美しく輝かせるのである。

第三節 ルソーからモーツァルト

2. 「自然に帰れ」のモーツァルト

モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》は「死は、魂が（体から）抜けてゆくのが見える」と歌われる。それは『エミール』でルソーが「肉体と魂の結合が壊れるとき、……自然の状態に戻る」ということと符合している。

3. 《村の占い師》から音楽療法へのアプローチ

スタロバンスキーの分析は「相手の浮気が気になるのであれば、あなたも浮気をしなさい」と言う。同毒療法としては正論である。

第三節 ルソーから音楽療法へ

1. モーツァルトへの継承 / 3. オペラ《村の占い師》から《むすんでひらいて》への系譜

《村の占い師》から出発した系譜は、音楽療法へ二つの分岐となった。一つはモーツァルト音楽療法、もう一つは《むすんでひらいて》の遊戯歌への枝である。両者ともに、ルソ

一の自然主義を引き継ぎ、偶然にも音楽療法へ適用されるようになった。

4. 《ルソーの夢》に託された教育論

《村の占い師》が《むすんでひらいて》の原曲であることは、海老沢敏が解明している。作詞について筆者の仮説は『エミール』文中の「体を動かせば動かすほど」とは体育、遊戯である。それに「歌をうたうこと」を結合すれば遊戯歌となる。

第四章 ルソーのトラウマから音楽療法へ

自然によって害された病は、その原因である自然によってのみ治癒が可能である。「消極教育」は、自助作用、同毒療法（ホメオパシー）に共通する。学習者自らが問題点を発見する。生徒が「消極的に」「時間を失う」と感じられるぐらいが、望ましい時間量の状態であろう。教師主導での「学習指導案」を捨てることである。

音楽療法も同様に、セラピストはクライアントからの、自然と湧き上がってくる「生きる力」を待つだけである。それは、セラピストの積極性を控えるだけで十分な作業である。音楽療法士が「音楽療法実施計画書」を捨てること。それは「消極的」である。

(2) 経験学習と音楽療法

ルソーの教育原理について、林信弘は次のように指摘している。

ルソーの学習理論の核心を貫いている原則は、すべて学習は経験的なものでなければならないということ、もっと正確に言えば、すべての学習は経験から出発し、あらゆる知識はつねにその経験と関連づけて秩序づけられなければならないということである。 ———林信弘———

この「学習」ということばを筆者は「音楽療法」と読み替えてみる。以下の作文である。

ルソーの学習理論の核心を貫いている原則を音楽療法へ応用すれば、すべて音楽療法は経験的なものでなければならないということ、もっと正確に言えば、すべての音楽療法は経験から出発し、あらゆる知識はつねにその経験と関連づけて秩序づけられなければならないということである。 ———筆者———

ルソーは教育を「経験的」なものとして構想するのであるが、音楽療法は教育以上に実践的営為であるがゆえに、当然「経験的」でなければならない。その観点から、ルソーに対するオマージュとしての、以上のような読み替えによって、古典的教育学の原理を現代の音楽療法の理論に応用できることが裏付けられる、と言えるのではないか。

2. 消極教育論の音楽療法への応用

『エミール』における消極教育は以下の部分である。

初期の教育はだから純粹に消極的でなければならない。それは美德や真理を教えることではなく、心を不徳から、精神を誤謬からまもってやることにある。あなたがたがなに一つしないで、なに一つさせないでいられるなら〈以下略〉ルソー『エミール』

筆者は、ルソーの言葉にある「教育」という語を、そのまま「音楽療法」という語に入れ替える。ルソーに対するオマージュとして、再構成する。

音楽療法のクライアントへの最初の導入はだから純粋に消極的でなければならない。それは歌や楽器を教えたりすることではなく、心を不徳な既存の音楽から、またクライアントの精神を、そのクライアントに不必要な音楽からの悪影響からまもってやることにある。音楽療法士がなに一つさせないでいられるなら、〈以下略〉——筆者——

上記オマージュの意味するところは、音楽療法のクライアントは、唱歌的才能や楽器演奏へのコンプレックスから解放されていなければならない。自然に口を出る声、無意識に感じる音への関心が音楽療法の出発点である。無理に歌わせたり、演奏を強いたりすることによって、音楽的知識や技能への偏見を助長したり、合唱や合奏などへの嫌悪感や警戒感を与えてはならない。その意味で、音楽療法は「消極的」でなければならない。

第五章 終結

本論文から、音楽療法の「定義」をルソーに基づくものとして提案する。

音楽療法とは「音楽において自然人的人間性への回復を促す行為」である。

細説として、音楽療法とは「現代人が本来の自然人に帰るために、コミュニケーションの起源にさかのぼって社会性を再構築する音楽言語的な営みであり、個々人の幸福追求ではなく、社会の一員として、他者との円滑なコミュニケーションを取りながら、現在置かれている自然環境よりも一歩でも「生活の質」の向上に寄与するために楽音を楽しむ営み」である。

審査結果の要旨

1. 評価

本論文は三つの部に分けられており、第一部が「ジャン=ジャック・ルソー」、第二部が「音楽と音楽療法」、第三部が「音楽療法へのアプローチ」とされている。第一部の内容が最も多く全体の半分近くを占めているが、各部の配列は「ルソー哲学を音楽療法へ応用する」という執筆目的に沿っており、整合性のある論理展開となっている。まず第一部において、ルソーの生涯と彼の思想展開との間の密接な関連性を軸に、ルソー自然主義の特質が多面的に追及されている。次に第二部において、現代日本における音楽療法の定義および歴史の変遷を中心とした考察がなされ、最後に第三部で、ルソーの哲学を音楽療法へ応用する試みが、先行研究を踏まえた上で展開されている。また、予備審査論文の提出後に、フランス語を専門とする学者（本学の飯田伸二教授）の支援を受けて、フランス語原文の誤読や誤解を避けるように努めた結果、論旨はより正確なものとなっている。

第一部は六つの章から成り、順次「経歴」「ルソー島」「音楽での就職」「自然」「深層真理」「自然に帰れ」という章題が付けられている。ルソーの生地が、一種の陸の孤島であるスイスのジュネーブであることをはじめとして、ルソーの生涯には色々な島との関連が認められ、彼の墓地もルソー島と呼ばれていること。また、「自然に帰れ」との語句はルソー

自身が述べた表現ではなく、彼の思想を総合的に集約した結果として成立した標語であること。自分の子どもたちを養護施設にあずけたルソーの「捨て子行為」の根底に、「捨て子」と「自然の子」とを架橋する深層心理的動機がうかがわれること、などが指摘されており、いずれも従来のルソー論の枠にとどまらない独創的論述となっている。特に「字謎」として、ルソーの深層心理を「アナグラム」や「交差対句法」を用いて抉り出そうとする試みは、完全な証明とするには不十分であるとしても、非常に独創的な試論として高く評価できる。

第二部は、第一章「音楽」、第二章「音楽療法の定義」の二つの章に分かれている。第一章は、音楽が起源的に音楽療法的なものであったという視点から論述されており、第二章は、現代における音楽療法の定義が、1960年代以降において、どのような変遷をたどっているか、という観点から論述されている。著者（中間氏）は、かつて本学短期大学部に在籍していた時、「音楽療法コース」を専攻していたので、その時の学修経験を有効活用した内容となっている。

第三部は五章から成り、順次「はじめに」「ルソー哲学からプレ音楽療法へ」「ルソーからモーツァルトへ」「ルソーのトラウマから音楽療法へ」「終結」という章立てとなっている。第一章で、ルソー哲学を音楽療法へ応用できる可能性が提起され、第二章で、ルソーの謳う「博愛」の精神に音楽療法に通底する基盤が認められること、ルソー著『告白』には音楽療法に言うところの「回想法」が認められること、『音楽辞典』に見られるルソーの執筆内容や、『言語起源論』などの内容にも、音楽療法へ展開する示唆が含まれていることなどが指摘されている。第三章では、ルソーとモーツァルトとの関連に着目し、音楽家でもあったルソーの自然主義はモーツァルトを通して音楽療法へと展開したとの解釈がなされている。また、ルソー作「むすんでひらいて」の原曲が、友人との合唱や手足を動かす動作を通して音楽療法的に大きな効果をもたらすものであることが指摘されている。第四章は、ルソーの教育論『エミール』に見られる「消極教育」の立場が音楽療法に有効な基礎的理論を提供するものであることを中心に論述されている。ここでは、ルソーの言葉にある「教育」という語を、そのまま「音楽療法」という言葉に入れ替えるだけで、文意を損なうことがないとされ、その文案が具体的に示されている。第五章では、まとめとして、ルソー自然主義の立場からの「音楽療法の定義」が提案されている。すなわち、「音楽療法とは、音楽において自然的人間性への回復を促す行為である」と定義され、その内容が「音楽療法とは、現代人が本来の自然人に帰るために、コミュニケーションの起源にさかのぼって社会性を再構築する音楽言語的な営みであり、個々人の幸福追求ではなく、社会の一員として、他者との円滑なコミュニケーションを取りながら、現在置かれている自然環境よりも一歩でも『生活の質』の向上に寄与するために楽音を楽しむ営みである」と説明されている。

本論文は、ルソー哲学の核心たる自然主義と、音楽家でもあったルソーの生涯とを、音楽療法という観点から考察したものであり、従来のルソー研究に新たな一石を投じるもの

となっている。中間氏は音楽家の演奏場面を撮影するカメラマンであるとともに、自らギターを演奏する音楽家でもある。その芸術家的感性によらなければ見えないであろうところのルソーの深層心理が直観的に捉えられており、そこには注目すべき独創性が認められる。

副査からは、本論文が博士学位申請論文として十分なレベルに達していることを踏まえ、次のような問題点が指摘された。

- ①主観的な論述が多々見られ、根拠が十分に示されていない部分がある。
- ②引用に頼りすぎており、自身の考察が不足している。
- ③抽象的な表現に逃げており、説得力に欠ける個所が見られる。
- ④ルソーの宗教観の分析が不十分である。
- ⑤文学界の自然主義とルソーの自然主義との共通点や相違点の説明がほしい。

これらの問題点の指摘に基づき、主観性の強い部分や根拠のあいまいな部分を削除したり、考察の足りない個所を補ったりした結果、より明快でコンパクトな内容に改善することができた。

なお、著者は博士課程在籍中に、積極的な研究発表活動を継続し、学会発表（いずれも単独）8回、学術論文（いずれも単著）6点（うち4点は査読有）、研究ノート2点（単著1、共著1）という、大学院生としては非常に多くの業績をあげている。その他、『随筆かごしま』への投稿、ルソー誕生300年記念「スタンプショーかごしま」での作品展示、各種音楽会でのギター演奏など、社会的活動にも熱心に取り組んでいる。これらの研究業績や社会的活動は、著者に研究者としての十分な資質があることを示すものである。

2. 残された課題

今後の課題として、「ルソー哲学に基づく音楽療法の実践」という点が挙げられるが、それについて、著者自身は「自ら実践に取り組みたい」との意向を有している。

3. 結論

以上のように著者は、自ら洞察した理論を実践的に究明しようという旺盛な意欲を持ち、その実践活動を通じて音楽療法理論の更なる深化を目指しているが、その目的達成に必要な「自立して研究できる基礎的能力」は十分に具備していると判断される。